

研修による教師支援に関する一考察

－研修に参加する教師の状況とニーズをふまえた研修事例を通じて－

Considerations related to one teacher support by training

－Through training cases were based on the needs and situation of teachers to participate in training－
有沢孝治

Koji ARISAWA
東海大学

TOKAI University

Key words : 教師支援, 教員研修, 教師のニーズ

目的

教員研修が教師支援の一つの形態とすれば、参加教師や実施主体（教育委員会や学校）のニーズや状況をふまえた内容にすることが必要である。そこで本論では、参加教師のニーズに即して設計・実施した研修プログラムに対する参加教師の評価を検討し、教師支援に寄与しうる研修について考察する。なお、研修内容の設計・実施に際しては、山本（1978）のソフトユニットの考え方（活動はハードとはならずソフトであり続ける）を援用した。

方法

20XX年と20XX+1年にA県B市の教育委員会から依頼を受け設計・実施した学級経営に関する教員研修（2時間）について参加教師に対してアンケートを行った。参加教師は計38名（小22名、中16名＝男性18名、女性20名）である。研修プログラムは、B市教育委員会から参加者の傾向（経験年数、担当学年など）や現在抱えている学級経営上の課題などを聴取し、その内容をもとに設計した。例えば、気持ち疲れている教師が多いということから自尊感情を刺激するようなワークを、いじめ予防に取り組む教師が多いということから自己認知の理解を促すようなワークを導入した（表1）。

表1. 参加教師のニーズや状況とそれをふまえたエクササイズ名とねらい

ニーズ状況 ：研修参加者が小中教師組合であり、同地区の教員であるが知人面が知人面に近い教員という状況。 エクササイズ1. 心と心の握手（5分） ねらい：体と心をほぐす。関係開始を促す。
ニーズ状況 ：子どもの自覚を高めたい。元気が出るような活動を展開したい。教師の元気を育てたいというニーズ。 エクササイズ2. 一言プレゼン（15分） ねらい：自己肯定感を高める。
ニーズ状況 ：違うことは悪いことではなく、当たり前のことと理解してほしい。いじめ予防のヒントになる活動はないかというニーズ。 エクササイズ3. その時あなたはどんな顔（15分） ねらい：自己認知の違いについて理解を深める。
ニーズ状況 ：子どものグループ活動でのグループワークで対峙することがある。楽しみながらグループワークで対峙したいというニーズ。 エクササイズ4. わけっこオリンピック（10分） ねらい：楽しみながらグループワークをする。
ニーズ状況 ：共同作業の中で自由な表現ができるような活動ができると子どもたちも関係が深まると考えている。 エクササイズ5. ひも・おもいマジネーション（15分） ねらい：自由な表現を促す。協力する力を育む。
ニーズ状況 ：中学生になってキャリア教育が始まるので、その準備として自己のことを知る活動を展開したいというニーズ。 エクササイズ6. 私のイメージあなただのイメージ（20分） ねらい：自分が見ている自分と他人が見ている自分との違いを知る。

研修後のアンケートは、B市教育委員会が作成し、表2に示した7項目（4件法）と自由記述で構成されており、記名式（氏名と学校名）である。本論では、この7項目について分析し、本研修に関する参加教師の評価について検討する。分析にはSPSS16.0.1を用い、多変量の分散分析を行った。

結果

参加教師の78.9%（小学校教師の86.4%、中学校教師の68.8%）が総合的にとても役立つ研修であったと評価していた。次に参加教師の属性による評価の違いについて検証する。総合評価を含む7つの項目をそれぞれ従属変数とし、学校段階と性別を独立変数として、多変量の分散分析を行った。その結果「実践的な理論や技術が身につく今後の職務に生かせる」（ $F(1, 34) = 8.87, p < .01$ ）において学校段階で小学校教師に主効果が認められた。また、性別ではいずれの項目でも有意な主効果は認められなかった。さらに、交互作用も認められなかった（表2）。

表2. 学校段階と性別による各アンケート項目の平均得点と分散分析の結果

性別	小学校（平均得点）		中学校（平均得点）		主効果（F値）		交互作用
	男性	女性	男性	女性	学校段階	性別	
自己の研修・研究意欲を高めることができた	3.57 (.53)	4.00 (.00)	3.64 (.50)	3.40 (.89)	2.61	.34	4.03*
自己の責任や役割（職務）を改めて自覚することができた	3.29 (.76)	3.67 (.49)	3.27 (.65)	3.60 (.55)	.04	2.81	.02
新しい情報を知ることができ、教育的な視野が広がった	3.57 (.53)	3.93 (.26)	3.36 (.67)	3.40 (.89)	3.59*	1.04	.69
日頃感じていた問題点を整理することができた	3.00 (.82)	3.40 (.51)	3.09 (.54)	2.60 (.89)	2.49	.04	3.93*
今後の課題と取り組みの方向性を見つけることができた	3.29 (.95)	3.60 (.51)	3.27 (.65)	3.00 (.71)	1.68	.01	1.54
実践的な理論や技術が身につく。今後の職務に生かせる	3.71 (.49)	4.00 (.00)	3.36 (.92)	3.00 (1.00)	8.87**	.03	2.05
総合的にみて役立つ研修であった	3.57 (.54)	4.00 (.00)	3.64 (.67)	3.40 (.89)	2.06	.27	3.18*

()内は標準偏差 ** $p < .01$ † $p < .10$

考察

小学校教師と中学校教師では小学校教師の方が概ね評価は高かったが、全体を概観すれば、小中教師の双方にとって総合的に役立つ研修であったと推察する。この背景には、参加教師や実施主体の状況やニーズをふまえたことが第一に考えられるが、エクササイズの有機的連結、参加教師の参加観などもあると考える。

講師は参加教師や実施主体のニーズを探り、そのニーズに対して講師自身のシーズを最大限に活用し、研修プログラムを設計・実践することが教師支援の効果を高めることになるかと考える。

参考文献

山本銀次, 自己開発とソフトユニット, pp.97-124. 東海大学出版会 (1978)